

生態史クロニクルに向けて
田口理恵（東海大学海洋学部）

Rie TAGUCHI
(The School of Marine and Technology, Tokai University)

プロジェクト・リーダーの指示のもとに、メコン流域地域をめぐる大状況の理解を深めつつ、同時に各班の調査地や各地点で観察したさまざまな出来事を俯瞰し、あるいは出来事相互の関連性を考え、議論していくための基盤づくりを進めてきた。その作業経過は、末尾につけた資料-1 にまとめているが、雲南日報の情報整理とラオス年表の作成から始まった。雲南日報からはじまるクロニクル雲南編に向けたこの一年の作業経過は、宮脇報告分で後述するが、もともと雲南日報に記載された情報をもとに、雲南における生態環境の通年変化をつかむことができるのではという着想から、プロジェクト・リーダーらが雲南日報サンプルを購入してきた。その着想をいかに具体化させていくかを議論するなかで、まずは雲南日報の情報内容とその傾向や、記事の整理手順や作業量などを把握することが先決と、購入サンプルを用いてのモデル作業に取り掛かった。一方、年表の作成は、モノと情報班の発足のきっかけとなった博物館コレクション調査の延長でもあり、それぞれのコレクションが収集された時期それぞれの、ラオスの時代状況を押さえる必要性を感じ、ラオス史概略を年表として整理する作業をはじめた。ラオス年表については、その後、生態史プロのメンバーに、それぞれの班の調査地やメンバーの専門的関心から見て、変化のきっかけとなる重要な政策や地域的な出来事などを、年表情報に書き加えていただければと思い、年表データへの追加記入を班長会議等で呼びかけた。しかし応答があったのは雲南歴史（ダニエルズ）班のみであった。雲南歴史班では、若手メンバーが年代分担して作業にあたり、概況と水害、地震などの事件を中心とした情報を補ってくれた。ラオス年表に情報を加えていくために、プロジェクト・メンバーからの応答を待ちながら、以下の作業を進めた。

- 1) 英国議会資料¹の仏領インドシナおよびシャム領事報告から、ラオス関連事項が記載された報告文書をピックアップし、文書内容の検討。
- 2) JICA 図書館のラオス開発プロジェクトに関する報告書検索一覧を改めて年代順に整理しなおし、年表データに開発プロジェクト情報を追加記入するための下準備。

BPP やプロジェクト報告書などの文書等にある断片情報を加えていくことで、ラオスの大状況を概観するための年表データをより精緻なものにしていくことができると考えたからである。

ただし、こうした文書類の記載情報には、報告者 / 作成者側のバイアスがかかっているため、公的な文書史料を扱う場合には、歴史家ほど厳密ではないにせよ、十分な資料批判・検討を行う必要もある。もっとも、年表データ作成作業は、大状況の理解だけを目的としているわけではない。研究対象地域に関する知識のボトムアップとともに、プロジェクト・メンバーが、各調査地やそこで観察されるさまざまな出来事を俯瞰するための手がかかりにもなり、出来事相互の関連性を議論していくための、プロジェクト共有の基盤インフラの構築することにある。つまり、それぞれの共同調査地での調査を進めば、当然、調査地の村落史、地域史も含めて、暮らしの下部構造に関する情報が幅広く蓄積されていくであろう。ただし、膨大な情報も、調査報告として公にされるのは、それぞれの班やメンバーの専門分野や地域別のアカデミック・コミュニティの関心に沿って選択され加工された情報のみになる。若手研究者になればなるほど、専門地域別もしくは専門分野別コミュニティに向けた調査成果の発信を意識した調査に専念することが当然求められるだろう。人類学的調査に対する反省から、調査中は、調査地というローカルな場所での出来事、実体験にとらわれすぎ、大状況、中状況が見えにくくなることも指摘さ

¹ 民博「京セラ文庫英国議会資料」コレクションでもある、総冊数 12,806 冊（下院文書は 1801～1986 年、上院文書は 1801 年～1922 年、欠損率は 1%未満）から、シャムおよび仏領インドシナの領事報告だけを集めた報告文書の資料集（文書コピーを製本、CD-R 版）が地域研によって作成されている。仏領インドシナ領事報告集は、1869 年～1914 年までの 50 文書に、インドシナ総督府刊行の『インドシナ統計年報』第一巻（1913 年～1922 年）から抜粋された統計が添付されたもので、50 文書中でラオスに関する記載事項があるのは 12 文書となる。資料集：シャム編（1856 年～1920 年）には、87 文書が収められており、チェンマイ区領事報告 22 およびナーン区報告 1 のなかに、ルアンプラバンや雲南との間での交易、人の移動、紛争等に関する記述が散見される。

れている。しかし、隣接する場所、離れた場所で、同時代に何が起きたのかを、互いにすりあわせながら考える機会というのはあまりない。また、調査地のミクロな生活世界における出来事や変化を考える上で、個々の専門・調査テーマから見て重要となる諸政策には目配りをするものの、専門や関心が違えば見落としてしまう関連事項もあるだろう。大状況の理解では、こうした見落とし部分を拾い上げていくことも必要である。さらに、ある政策が実施された際の、ローカルな側への浸透や対応に見る地域差、浸透のタイムラグもあるだろう。政策や異なる地点での出来事相互の関連性や相互作用を理解するには、大～中～小状況の間を反復し、参照しながら思索していくことが求められる。年表作成のための作業は、そうした知的作業のきっかけになるのではないかと考えた。

しかし、現実には、年表データへの追加記入呼びかけに対するレスポンスがないこと、実際に記入しようと考えるとかなりの手間ひまがかかることなどから、レスポンスを引き出すために、年表データ・ワークショップの実施を計画した。年表データ・ワークショップの実施に向けた準備過程で、以下に述べる問題を踏まえ、集中的、効率的に情報を集め議論する仕掛けについて、もう少し時間をかけた検討が必要と考え、当初予定した研究会ではなく、作業実働をベースにした作戦会議を重ねてきた。

要検討課題と考えるのは、第一に eco-history の history 理解に絡む問題である²。プロジェクトには、さまざまな専門分野からメンバーが参加しているが、変化を表現する手法も、自然科学系の分野（農学、医学など）、歴史学、人類学など、それぞれの分野によるデータ収集の方法上が暗黙の前提にしている時間軸の差異については、プロジェクト内でこれまで十分に議論されていない。

第二に、ラオス年表データと、雲南日報、雲南県誌をベースにした作業成果を、生態史クロニクルとして総合化することを作業目標とする以上、ラオス、中国の資料環境の違いをどう考えるのかという問題である。つまり、文書史料の豊富な中国と、文書史料の乏しいラオスとの違いである。しかも、歴史を考えるための資料として、さまざまなタイプの文献の活用を想定することができる。植民地や現政府による行政文書や各種公的機関による報告書類、雲南県志のような公的に編集され発行された文書記録や新聞類の活用のみならず、旅行者による紀行文や民族誌、過去の研究論文に記載されたデータも、旅行当時、調査時点での当該調査地の状況を書き留めた記録として参考にすることができる。もっとも、すべてを網羅することは難しく、人手、手間、時間と予算との兼ね合いで、使えるもの、使えないもの、できること、できないことが変わってくるので、プロジェクトとしてどういった資料を有効利用するかを意図的、戦略的に取捨選択していく必要がある。その際、各班の調査研究によって集められた資料との関連付けも考慮しなくてはならない。例えば、ダニエルズ班の集めている碑文も、モノと情報班メンバーが集めてきた研究者のフィールドノートや、手書きの日誌類もまた、公的な文書には残らない、その場、その時の状況を教えてくれる記録である。文字資料ではないが、写真や映像もまた、過去の状況を知るための重要な資料である。以上の諸記録の活用だけでなく、プロジェクト内に蓄えられる情報ソースには、メンバーが聞き取って記録した地域史や村落史、個々人の生き様に関する情報がある。

自らが記録する主体となった場合に、改めて意識させられるのが、報告者/作成者側のバイアスであり、同時に出来事を語ってくれる話者のバイアスでもある。例えば、中国の場合なら、政策上の判断で脚色・誇張され記載された事件と隠蔽される事件、出来事もあるだろう。ラオスならば（ラオスに限らず）、話者によっては、内戦中の辛い経験、サマナーなど、語れない・語らない・語りたくない経験や記憶もあるだろう。過去の経験に対する聞き取りは、人の生き様に踏み込むほどに、非常にセンシティブな問題をはらむことを忘れてはいけない[香月 2002]。さらに、集落住人が移転、移動してきた経過についての集団的記憶というレベルもあり、例えば、系譜、儀礼のように、民族ごとに独自の文化的表現が見られる。下記の表にまとめたように、対象とする民族や地域、その場所が所属する国家に応じて、利用可能な文書資料の種類や、歴史の語りに影響を及ぼすファクターとその強弱が異なるなど、資料環境の違いは、文書量の多少だけではない。文字化された記録、非文字媒体による記録、記録化の作業と、それぞれの情報ソースに、質的な違いがある。こうした差異を踏まえつつ、ラオス・雲南年表として統合していくために、“記録”と“記憶”のバイアスに関する議論を積み重ねていく必要があるだろう。

² 文化生態学、歴史生態学、政治生態学を踏まえつつ、地域生態史の総合的研究という新しいスタンスが提起されており「市川 2003」、「eco-」の理解もまた、プロジェクト内で議論すべき課題かもしれない。

表－1：資料環境の差異

<文献の中国>	<伝承のラオス>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国による史書編纂事業の伝統 ・ 正しい歴史と語りの妥当性 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会主義国家、革命と国づくり ・ 70 年代以前、以降の記録消失、不在 ・ 語れること、語れないこと ・ 90 年代からの急激な社会変化
<ul style="list-style-type: none"> ・ 少数民族ごとの歴史軸 (系譜など、過去から現在までの連続性に関する文化的表現、認識法) ・ 持続的な資源利用・保全の政治的言説：周辺地域 (将来に残したいというビジョンの浸透、形成・・・) ・ 中国化？伝承の文字化 (族譜の生産、集団の歴史的正当性の主張、根拠) 	

文書史料の豊富な中国と文書史料の限られたラオスと、資料環境の違いもあり、プロジェクトでは、1945～2005 年と対象地域における 60 年間の変化過程を辿るために、雲南とラオスで異なるアプローチをとることにする。生態史クロニクル雲南編の場合、生態環境変化を探る手段として「県誌」を積極的に活用していこうと考えている。次節では、宮脇が「県誌」を用いたクロニクル雲南編のこれまでの作業経過を、兼重が「県誌」という資料の位置づけと利用の意義を述べる。一方、ラオス編の場合、共同研究会形式で、医療史、政策史、個別地域史、調査地の集落史、個別商品の商品史など、テーマごとの通年変化を辿りつつ、参照しあえるような機会を設けたいと考えている。西本が、ラオスの現代史を再考する上で重要となる、個々人の口承やライフストーリーについて、その意義や可能性を論じる。

参考文献

- 市川光雄 2003 「環境問題に対する 3 つの生態学」池谷和信編『地球環境問題の人類学
—自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社。
- 香月洋一郎 2002 『記憶すること・記録すること—聞き書き論ノート』吉川弘文館。
- 川田順造 2000 「序章 生活の地域史」『生活の地域史』、山川出版社。
- 港千尋 1996 『記憶 「創造」と「想起」の力』、講談社選書。

資料-1：生態史クロニクルに向けてのこれまでの作業

ラオス編	雲南編
3～5月：ラオス年表作成（田口、雲南分は宮脇）	3月 雲南大学から「雲南日報」を入手
プロジェクトメンバーに送信、書き込み依頼	5月中旬～：雲南日報の記事選択、コピー、エクセル入力、キーワード一覧作成（宮脇）
6月：ラオス・雲南年表にダニエルズ班からの書き込み	
7月4日：文資プロ研究会@民博（秋道、久保、川野、後藤、角南、田口、宮脇） ・年表関連について報告（田口）、雲南日報の作業経過報告（宮脇）	
7月3日：班長会議、JICA 報告書の紹介（西村）	7月26日：雲南日報研究会実施に向けた準備打合せ (秋道、田口、宮脇)
8月：ラオス JICA プロジェクト情報の整理（田口）	
9月：英国議会資料仏領インドシナ、シャム関連文書コピー（田口） ⇒英国議会資料仏領インドシナ、シャム関連文書 CD-R の購入（秋道、田口）と、情報整理（田口）	9月16日：合同研究会（雲南日報+ダニエルズ班）@AA 研 (秋道、ダニエルズ、清水、立石、西川、増田、高須、田口、 宮脇)
10月9日：班長会議@民博、年明けに年表データ研究会 実施に関するプランを提案（秋道、田口）	9月27日：雲南生態史データベース研究会@地球研（秋道、 久保、兼重、西村、宮脇）⇒ <u>県誌の「大事記」入力</u> が提 案される
	10月11日：「雲南省地方誌弁公室」訪問（久保、宮脇） 雲南大学人類学博物館に県誌収集を依頼
	11月29日：雲南生態史データベース研究会@地球研 (秋道、久保、阿部、兼重、西村、田口、宮脇)
	1月11日：県誌購入に関する打合せ@地球研 (秋道、兼重、西村、田口、宮脇)
	1月16～20日：昆明で県誌と関連資料の購入と郵送 (秋道、宮脇、西村)
	1月下旬：県誌データの翻訳・入力作業メンバーの決定
	2月：購入県誌の到着と作業スタート⇒ <u>国境県より開始</u> <u>「大事記」の日本語訳、目次をエクセル入力する</u>
	3月：台北、北京に関連資料調査と収集（兼重）
2月4日：生態史クロニクル研究会作戦会議@地球研（兼重、清水郁、西川、田口、宮脇、山口、何、秋道） ⇒雲南、ラオスでの資料環境および方法論の違いがあり、分けて進めるなど。 ⇒雲南編は、入力作業の過程での問題を共有（作業メンバー、ダニエルズ班等でMLに疑問を書き込みなど） ⇒ラオス編は2月17～19日に打合せ@ビエンチャン（久保、田口、西本太）	
2月12日：全体会議、班長会議@雲仙小浜 生態史クロニクルに関わるこれまでの活動経過と目標、班横断の取り組みについての提案（秋道）、県誌を利用した 雲南編作業についての報告（兼重）、全体会議終了後の有志による議論と、その内容をもとに秋道が班長会議で提案 など	